立命館大学唯物論研究会

Gakuho Shirai(Graduate School of Letters, M1)

研究会の目的

古典的なマルクス主義の理論的再検討を出発点とし、特に戦後日本における社会科学の受容と展開を批判的に検証することを課題とした。日本における「社会科学」成立の特質と、その現代的有効性を明らかにすることを目指した。また、戦後唯物論における「主体性論争」や「技術論」の検討を通じ、唯物論哲学の可能性、その探究を課題とした。

開催内容

マルクス主義の基礎と戦後唯物論の検討(夏季):

エンゲルス『空想から科学へ』等の古典読解により唯物論の基礎範疇を確認した。人間と環境の弁証法的相互作用としての「実践」概念に焦点を当て、戦後日本の唯物論研究がいかにして「主体」を取り込もうとしたかを探求した。

戦後日本社会科学（経済思想）の再評価(冬季):

大塚久雄『欧州経済史』、高島善哉によるアダム・スミス研究、内田義彦『資本論の世界』等の精読を行った。経済史・経済思想史の観点から、近代市民社会の形成過程がいかに理論化され、いかに実践と接合されたかを検討した。現代の労働疎外やアトム化する個人の問題を構造的に捉える上で極めて有効であることを確認。

現代唯物論への接続(春季):

上記の議論(夏季・冬季)を踏まえ、現代におけるマルクス研究の動向を探った。

研究成果

マルクス主義の古典的著作の読解から出発し、戦後の論争史を経て、大塚久雄、高島善哉、内田義彦といった戦後を代表する経済思想家の再検討へと、体系的に学習を進めることができた。 当初の計画通り、基礎文献の精読を通じて発展的な問いを共有し、理論的足場を構築しえた。これにより、単なる古典解釈に留まらない発展的な議論がなしえた。

特に、現代の社会的諸矛盾を分析するにあたり、単なる現象的記述に留まらず、その背後にある構造的要因へと遡及する視座・分析の重要性が再確認された。

以上の検討を通じ、次期以降の研究展開に向けた不可欠の前提となる基礎文献の習得、ならびに発展的・批判的な問題意識の共有という、当初の目的が達成された。

2025年度 研究会活動支援制度最終報告